

アメリカ小説と批評の研究

巽 孝 之

2014年から2015年にかけての期間は、北米メルヴィル学会と日本メルヴィル学会が連携して、アジアで初めての国際メルヴィル会議を準備した年として記憶されるだろう。この会議は隔年で北米および北米外部の都市が当番となる取り決めで、これまでもポーランドやイタリアといったヨーロッパ諸国を舞台にしたことはあったものの、極東が舞台に選ばれたことはなかった。しかし北米メルヴィル学会の切実なる要望で五年ほど前から準備が始まり、とうとう第十回国際メルヴィル会議が2015年6月25日(木曜日)から29日(月曜日)まで、慶應義塾大学三田キャンパス東館および北館にて開催される運びとなり、参加登録だけで世界各国から約130名におよぶ参加者を得た。多くの研究発表と並んで企画された四つの基調講演を担当したのは、芥川賞作家・池澤夏樹、劇作家で劇団燐光群主宰・坂手洋二、カンザス大学教授エリザベス・シュルツ、そして北米を代表するマジック・リアリズム作家にしてカリフォルニア大学サンタ・クルーズ校教授カレン・テイ・ヤマシタの四氏。基調講演に限り一般公開にしたので、会員外の参加も多く、正味四日間の会議には内外よりのべ200名ほどが足を運んだことになる。

本来は来期に報告すべきこの大会を強調するのは、アメリカ最大の文豪メルヴィルをめぐる恰절한研究と講演、はたまた熱いラウンドテーブルやシンポジウムは、まさにそれ自体がアメリカ小説と批評の最前線になりえていたからだ。げんに、この会議と絶妙に連動するかたちで、名著『白い鯨のなかへ』(初版・南雲堂、1990年；増補新版・彩流社、2015年6月1日)をもつ千石英世が、〈シリーズ もっと知りたい名作の世界〉の第11巻として『白鯨』(ミネルヴァ書房、2014年12月10日)の巻を編集担当し、英米文学の枠を超えた人選により、現在望み得る最高の『白鯨』ガイドブックを完成しているからだ。メルヴィルとポストモダニズムを架橋した杉浦銀策、マネエリスム文学思想史から作家を再定位した高山宏といった大御所から南部文学論の第一人者・後藤和彦、メルヴィルとアメリカ先住民の関わりを丹念に追跡する大島由起子、はたまた南米ラテンアメリカ文学の権威・野谷文昭、フランス文学研究から『白鯨』を読み直す宇野邦一に至るまで、総勢13名の寄稿はいずれも熱っぽく読みごたえ充分だが、かてて加えて、カラー写真や年表、図版、参考文献表にも細やかな配慮がなされている。専門家から学部生、はたまた一般読者まで、今後メルヴィルに接する者にはたえず座右に置きたい必読文献だ。

もっとも、今回はメルヴィルを除くと、いわゆる単独の作家に絞った作家研究が驚

くほど少ない。そんな状況下、日本ヘミングウェイ協会顧問の今村楯夫の貢献には絶大なものがある。彼はまず単著として『「キリマンジャロの雪」を夢見て——ヘミングウェイの彼方へ』（白鷗舎、2014年4月15日）において、作家が1930年代と50年代の二度にわたって滞在したアフリカ、とりわけベナン共和国を追体験し、さまざまなインタビューを通じたフィールドワークによって、テキストだけではわからないコンテキストをめぐって、さまざまな発見と実感を手にする。なるほどタイトルに見える「キリマンジャロの雪」はもちろん「アフリカの緑の丘」など、ヘミングウェイとかつての暗黒大陸を結ぶ線は自明のものとされてきたが、しかしたとえばキューバの海を舞台に据え、ノーベル文学賞受賞の決定打となった『老人と海』は「ライオンの夢」で終わるのみならず、主人公サンチャゴがむかし大柄な黒人とカサブランカで腕相撲した回想をも孕むばかりか、まさにこのカサブランカこそはモロッコとともにキューバにも実在する地名であることの環大西洋的意義が再確認されていく展開はスリングというほかない。今村はもう一冊、真鍋晶子との共著で『ヘミングウェイとパウンドのヴェネツィア』（彩流社、2015年1月20日）を上梓している。今村が第一部「ヘミングウェイとヴェネツィア」を、真鍋が「パウンドとヴェネツィア」を執筆するという二重奏の構成で、モダニズムの興行師にして偉大な詩人パウンドと、彼に薫陶を受けその理論が要求するおりのハードボイルド文体を開発したヘミングウェイとが、政治的イデオロギーの相違にもかかわらず相互影響し、そのさいヴェネツィアがひとつの結節点となっていたことが雄弁に明かされる。

他方、高野素志『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』（松籟社、2015年3月20日）もまたフィールドワークの成果であるが、こちらは日本の英文学研究全般における盲点というべきキリスト教の問題を、これまたそうしたアプローチがほとんど試みられてこなかったヘミングウェイに適用し、彼の信奉したカトリシズムがその人生から作品までいかに浸透していたかを克明に考察した一冊。

個人作家研究の収穫としては最後になるが、久我俊二『スティーヴン・クレインの「全」作品解説』（慧文社、2015年3月19日）は北米クレイン学会とも関わりの深い著者が、往々にしてアメリカ自然主義および印象主義の文脈で語られ、『赤い武勲章』や『街の女マギー』の作家としてばかり記憶されることの多いクレインを、その全生涯と全作品を網羅することにより、抜本的な再評価へと導く。

*

続いて、文学史的パースペクティヴから成された個人業績を振り返ってみよう。

まず下河辺美知子の『グローバリゼーションと惑星の想像力——恐怖と癒しの修辭学』（みすず書房、2015年3月16日）はタイトルどおりガヤトリ・スピヴァクの提唱する惑星思考やグレッチェン・マーフィーの半球思考をモチーフに据え、スピヴァクの師匠ポール・ド・マンの脱構築批評から彼の日本の弟子・水村美苗、ハンナ・アー

回顧と展望

レントのファシズム批判, ジュディス・パトラーの反知性主義批判に至る幅広い射程において、メルヴィルからマイケル・ジャクソンまでを分析対象としつつ、9・11以後の言説空間をダイナミックに読み直す21世紀アメリカ研究の収穫。

つぎに庄司宏子『アメリカスの文学的想像力——カリブからアメリカへ』(彩流社, 2015年3月31日)は、19世紀アメリカ・ロマン派研究から出発した著者が、白人少女と黒人少女とが胴体でつながりスカートで必ず片方の顔が隠れるトプシー・ターヴィー人形をモチーフに、いわゆる南北戦争以前から以後にかけての文学をチャールズ・ブロックデン・ブラウンやレオノーラ・サンセイ、ナサニエル・ホーソーン、ピーボディ姉妹、S・ウェア・ミッチェル、シャーロット・パーキンス・ギルマンにおよぶ文学者たちを精読し、いったいアメリカ文学にはなぜ分身ないし二重自我(ダブル)が数多く登場するのかという根源的な問題を解き明かそうとした野心的試み。

そして諏訪部浩一『ノワール文学講義』(研究社, 2014年5月30日)は、モダニズム作家フォークナーを専攻しながら『「マルタの鷹」講義』では日本推理作家協会賞を受賞した著者が公刊したその続編ないし姉妹編、じっさい全四部構成の第三部はハメット論であり、とくに『マルタの鷹』の翌年に発表され作家自身が最も気に入っていたという『ガラスの鍵』の分析に一章が割かれている。ノワール文学の勃興期が世紀転換期の自然主義文学の勃興期と連動しクレインやシオドア・ドライサー、それにフランク・ノリスの諸作品とも無縁ではないこと、しかも社会的リアリズムのみならずロマンスとの共振も見られることを指摘したのは慧眼。

加えて、尾崎俊介の『ホールデンの肖像——ペーパーバックからみるアメリカの読書文化』(新宿書房, 2014年10月8日)も、タイトルだけ取ればJ・D・サリンジャー論のように見えるが、その全体は著者が第一著書『紙表紙の誘惑』(研究社, 2002年)以来こだわってきたペーパーバックから窺われる読者反応論と、自ら翻訳体験したハーレクイン・ロマンス論、ひいては黒人女性タレントのオプラ・ウィンフリーに焦点を当てたブッククラブ論から成り、主流文学の正典のみでは収まらない読書文化史を鮮やかに照らし出す。

ちなみに渡辺利雄の新刊『アメリカ文学に触発された日本の小説』(研究社, 2014年8月7日)は昭和女子大学オープンカレッジの大学院シリーズ講座「イギリス・アメリカ文学——ことばの楽しみ」(全12回)にもとづき、ポーと大岡昇平、メルヴィルと宇能鴻一郎、トウェインと半村良、アンブローズ・ピアスと芥川龍之介、ドライサーと石川達三、サリンジャーと庄司薫などなど、いまでは比較文学的定石となったカップリングを根本的に読み直し、日米文学の特質ばかりか現代における作者と読者の関係の変質にまで斬り込む。個人的には、時節柄、ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』が大岡昇平の『野火』へ与えた影響を再検討した第一章が最も啓発的だった。

アメリカ小説と批評の研究

*

ここで、学界外部の著者によるアメリカ小説研究への貢献に着目したい。

まず、構造主義言語学の祖フェルディナン・ド・ソシュールを主題に選んだ博士論文で高い評価を得た言語思想史研究の俊才・互盛央の『言語起源論の系譜』（講談社、2014年5月22日）はタイトルどおりギリシャから近現代に至る言語起源論の流れを再確認することでヨーロッパ思想史へ一石を投じようとした野心的な試みだが、その最大のモチーフを成すのが19世紀前半に社会から隔絶されて育った野生児カスパー・ハウザーである。彼を主役に、バベルの塔以後から近代民主主義の逆説へ及ぶ気宇壮大なスケールには息を呑むしかないが、そのプロセスにおいて、19世紀アメリカ・ロマン派作家メルヴィルがカスパーに何度か言及したことに着目し、失敗作とされる長編小説『ピエール』や生前最後の長編小説『詐欺師』、未完とされる死後出版の中編『ビリー・パッド』を克明に解析しつつ示す洞察は秀逸というほかない。

つぎに文化人類学の大御所・今福龍太の『ジェロニモたちの方舟——群島-世界論“叛アメリカ”篇』（岩波書店、2015年2月6日）は9.11同時多発テロ以降のアメリカにおける言説空間が対岸の火事ではなく、先住民代表ジェロニモはとうに死に絶えた少数民族どころではなく、むしろアメリカ大陸を超えて拡散する惑星の主体と化しているのを実感させる。それは日本アパッチ族の伝統を鮮やかに書き換える画期的なジェロニモ像であり、現代社会の病弊たる自己崩壊システムへの抜本的な異議申し立てを成す「叛アメリカ宣言」にほかならない。そうしたパースペクティヴから、今福は米西戦争の影に隠れて忘却されがちな米比戦争の文脈を重視し、マーク・トウェインが生前には発表し得なかったブラックユーモア短篇「戦争の祈り」の現代的意義を最も正統的に再評価してみせる。

もう一冊、アメリカ宗教思想史を専攻する森本あんりが放ったベストセラー『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』（新潮社、2015年2月20日）も入れておく。評者はもともと2000年代アメリカと2010年代日本は上手く出来すぎているぐらいにアナロジー可能と考えていたが、18世紀大覚醒運動の中核ジョナサン・エドワーズ研究から出発したアメリカ神学研究の権威・森本あんりの本書は、リチャード・ホフスタッターの名著『アメリカの反知性主義』（1963年）をじっくり読み込みながらも21世紀現在をふまえ抜本的に更新するような構想を持つ。本書の文脈ではフランクリンやジョージ・ホイットフィールド、ラルフ・ウォルドー・エマソン、トウェインのみならず、映画化されて人気を博した女性作家ノーマン・マクリーンの『リバー・ランズ・スルー・イット』（1976年）までが巧みに組み込まれる。目下我が国の言説空間では反知性主義の字面ばかりが暴走しているが、本書はそこへ強力に介入し、アメリカ精神の本質を広く知らしめた。

共著では、倉橋洋子・辻祥子・城戸光世共編『越境する女——19世紀アメリカ女性

回顧と展望

作家たちの挑戦』（開文社出版、2014年3月31日）が高尾直知のマーガレット・フラー論とメーガン・マーシャルのフラー没後伝のあいだに大串尚代のエライザ・バックミンスター・リー論、中村善雄のエレン・クラフト論など力作八編を収めた共同研究の成果だが、共編者たちの論考（城戸のソファイア・ピーボディ論、倉橋のメアリー・ピーボディ・マン論）に顕著のように、そのきっかけが彼女たちがマーシャルのピューリッツァー賞受賞に輝く伝記『ピーボディ姉妹——アメリカ・ロマン主義に火をつけた三人の女性たち』の翻訳に関わることにあつたということが興味深い（原著 2005年、邦訳南雲堂、2014年）。長く文豪ナサニエル・ホーソーンの子としてのみ語られることの多かったソファイア・ピーボディは、じつは彼女自身が文才に恵まれるも、結婚後には自作の執筆を断念し、夫の死後になって遺著管理や出版のみならず、姉メアリーとともに滞在したキューバの記録の執筆に精を出し、それが20世紀後半になってようやく陽の目を見ているのだ。したがって、もうひとりの先覚者的フェミニスト作家として、現代の研究者による検証がようやく始まった気運をみごとに掬い取り、ピーボディ姉妹周辺の文脈を再構築してみせた本書の意義は決して小さくない。

もう一冊、注目すべき共同研究の成果が松本昇・中垣恒太郎・馬場聡共編の『アメリカン・ロードの物語学』（金星堂、2015年3月31日）である。「ロード・ナラティヴ」が「ロード・ムービー」「ロード・ノヴェル」「ロード・ソング」などを統括する文学批評用語として流通し始めたのは前世紀の終わりごろからで、同書はしがきにもあるとおり、新世紀に入ってからには拙著『アメリカ文学史——駆動する物語の時空間』（慶應義塾大学出版会、2003年）がまさにそのコンセプトのもとに文学史を再組織化したので評者にも大いに責任があるのだが、以来12年の歳月を経て、我が国の学界においても同概念がすっかり定着したことは、全五部構成、寄稿者数総30名、全528ページのこの大著の重さそのものが示すだろう。中では伊達雅彦のノリス論、後藤篤のナボコフ論、三添篤郎のケルアック論、白川恵子のマット・ジョンソン論、深瀬有希子のゾラ・ニール・ハーストン論、大場昌子のグレイス・ペイリー論、渡邊真理子の1980年代アメリカ小説論が、それぞれ読ませた。

最後にエコクリティシズム系の共同研究を。

ひとつはASLE-J／文学環境学会設立二十周年を記念して出版された、小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江の共編『文学から環境を考える——エコクリティシズム・ガイドブック』（勉誠出版、2014年11月25日）。サブタイトルの通りの教科書だが、しかし冒頭に前掲カレン・テイ・ヤマシタの短篇「わたし、キティ」邦訳（喜納育江訳）と管啓次郎との対話を収録しているのが呼びもの。

もうひとつはエコクリティシズム研究学会がシリーズ化している叢書の第三巻、熊本早苗・信岡朝子共編になる『核と災害の表象——日米の応答と証言』（英宝社、2015年3月25日）。代表である伊藤詔子の簡潔明快な批評理論の見取り図とともに、松永

京子が3・11東日本大震災と日系女性作家ルース・オゼキの作品『あるときの物語』における環太平洋的想像力を検討した論考が収め、

論文評価の最後は、日本アメリカ文学会第五回新人賞の報告で締めよう。

2014年に同学会機関誌へ投稿された論文のうちで、編集委員会および新人賞審査委員会の厳密な査読を経て決定したのは下記の2編であった。両論文は同学会の機関誌に投稿された論文全26編(和文7編、英文19編)から掲載決定したものの6編(和文2編、英文4編)のうちから、新人賞の年齢制限(応募時に40歳未満)にあてはまるものに限定してさらなる審査を行った結果、英文号*The Journal of the American Literature Society of Japan*第13号掲載が決まったものである(2015年3月刊行)。授賞式は掲載に先立ち、2014年10月4日に札幌は北海学園大学豊平キャンパスで行なわれた第53回日本アメリカ文学会全国大会開会式にて挙行された。

●古井義昭(エモリー大学大学院)“‘My Dear Son’: Imagining Letters and Unmaking the Father in *Absalom, Absalom!*”

●Meghan Kuckelman(名桜大学助教)“Metonymy, Revolution, and the Eidetic Reduction in Lyn Hejinian’s *My Life*”

古井論文は、モダニズム作家ウィリアム・フォークナー最大の傑作のひとつともされる長編小説*Absalom, Absalom!*における登場人物たちのあいだでやりとりされる書簡群の内容と機能を克明に分析し、作品における父子関係の本質に迫った論文。編集委員長の後藤和彦氏はこう報告している。「議論の方向に新味が欠けるのではと指摘する委員もあったが、主題設定、議論から立証に至る手際、いずれもその明晰さ堅実さに対し高評価が寄せられ、受賞に至った」。

クックルマン論文は、モダニズムの伝統を継ぐとも言われるアドリエンヌ・リッチらL=A=N=G=U=A=G=E詩人の一員であり、我が国ではほとんど取り上げられることのなかったリン・ヘジニアンの自伝的作品を対象に、フッサールの現象学的還元を方法論とした分析によって、詩人の人生を綴った散文詩の言葉がいかに読者をも巻き込みつつ複層的な意味を帯びて行くかを浮き彫りにした論文。後藤編集委員長によれば「抽象的な議論を維持してゆく筆力を評価する」向きがあった一方、L=A=N=G=U=A=G=E詩人を中心にした「概説あるいはその詩的達成理解のための術語説明に紙幅を割きすぎたのでは」という批判もあったが、「全体的な試みの野心性が新人賞にふさわしいとの評に落ち着くことになった」。

若く新しい才能がますます開花していくことを、心から期待したい。

*

最後に、本欄では翻訳については網羅的には紹介しない方針なのだが、例外的に二冊のみ取り上げたい。双方の解説はゆうに研究論文の名に値するからだ。

ひとつは、マーク・トウェイン晩年の『それはどっちだったか』*Which Was It?*(里

回顧と展望

内克巳訳、彩流社、2015年3月31日)。トウエイン愛読者ないし研究者であっても知ることが少なく内外のトウエイン事典のたぐいですら取り上げられなかったこの未発表作品は1899年から1906年にかけて書き継がれ、ジョン・タッキー編纂の1966年のアンソロジーに収録されてようやく陽の目を見た作品だが、にもかかわらず、広く読めるかたちになっても、なお正統的な評価に恵まれて来なかった。しかし、今回の里内訳によって、本書が『まぬけのウィルソン』の系譜に連なるばかりか、代表長編『ハックルベリー・フィンの冒険』や傑作短篇「ハドリバグを墮落させた男」などとも共振することが実感されるようになった。その中心には、アメリカ合衆国における白人支配者層と黒人や先住民などの被支配者層のあいだで文化的な「ハーフ・ブリード」とも呼べる主体が形成されつつも、まさにそれゆえに悲劇を免れなかった逆説がひそむ。そうした構図を、巻末37ページにもおよぶ長編解説(四百字詰め換算で約70枚)で分析した訳者は、この長編が「無視して差し支えない作品であるどころか、マーク・トウエインの隠れた代表作と呼んでも過言ではない」と断言し、本書を通読した作家・星野智幸は、主人公ジョージが犯した不慮の殺人とそれがもたらした心の闇を『罪と罰』のラスコリニコフにたとえ、本書を「マーク・トウエインが、ドストエフスキーら近代小説の本格派と並ぶ作家であることを示す、傑作」と賞賛してやまない(『朝日新聞』2015年4月26日付14面)。

もうひとつは、ウィリアム・ジェイムズの孫にしてヘンリー・ジェイムズの大甥マイケル・ジェイムズの手になる『マイケル・ジェイムズの冒険』*The Adventures of M. James: A Sailor's Diary* (原著2005年; 水野尚之訳、大阪教育図書、2015年1月5日)。偉大なジェイムズ家の末裔は太平洋戦争中にアメリカ海軍軽空母モンテレーの気象担当下士官として乗り組み、日本軍との凄絶な戦闘について密かに記録しており、晩年に至って、その時の日記に膨大な写真を付したかたちで出版するに至ったのが本書である。我が国では長くテキスト中心の精読が支配的であったが、作家の末裔に会い、その交流からジェイムズ(家)研究を深めジェイムズ学者自身の研究の動機を再確認する作業もまた、アメリカ小説と批評の探究を豊かにするはずである。

(慶應義塾大学教授)